

今年の冬は、この多久の地にも例年になく雪が降り積もりました。

そして、今、三月を迎え、校門の桜のつぼみも少しずつ膨らみ、春の訪れを教えてくれています。

「ふゆ」という言葉は「ふえる」が語源であるという説があります。「はる」という言葉は「膨らむ」という意味の「膨張」の「張」、「張る」からきているという説があります。

植物の芽は冬の間、花を咲かせようとするそのエネルギーを増やし、一日一日たまっていくエネルギーがはちきれんばかりに膨らみ、春の訪れとともに芽吹き、花を咲かせます。

寒く厳しい冬の次に希望に膨らむ春がやってきました。

そして、北に天山、西に船山、八幡岳が、やさしくおおらかに今日の良き日を見守ってくれています。

コロナ禍の中、本来ならば、コミュニティスクールとして、地域の方々を来賓としてお招きし、たくさんの方々の保護者の皆様、可能な限りの在校生を一堂に集め、賑々しくかつ盛大にこの式を挙行すべきところですが、今なお続く感染症予防対策の観点から、ソーシャルディスタンスを確保したり、オンラインを活用したりするなど、新しい生活様式に基づいた、新しい卒業式を皆で作ることにしました。

こうした中、多久市教育委員会職務代理者江打正敏様、同教育委員太郎浦雅枝様、学校運営協議会会長辻恒浩様をはじめとする委員の皆様、PTA会長陣内健太様のご臨席のもと、また限られた中ではございますが、多くの保護者の皆様のご参列を得て、本日ここに第四回多久市立東原庁舎中央校の卒業証書授与式を挙行できますことを心より感謝申し上げます。誠にありがとうございます。

八十名の九年生の皆さん、卒業おめでとう。皆さんは、義務教育課程九年間を修了し、この東原庁舎中央校での学びに、本日ピリオドを打つこととなります。

保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。これまで九年間のお子様の成長を振り返るとき、その感慨もひとしおのこととお喜び申し上げます。在校生、職員一同、心からお祝いを申し上げます。

さて卒業生の皆さん、皆さんが入学して間もないころ、本校は、市内三つの小学校が統合されるとともに、一つの中学校が手を取りながら、小中一貫校として開校しました。

その後、小・中を太く貫く義務教育学校という新しい制度を導入し、以来、全国でも百数十校しかない、先導的な教育システム

を擁する学校の一つとして、教育活動を行ってきました。

年齢的に幅広く先輩や後輩と交流し、温かく見守ってくださる地域の方々の支えを受け、様々な専門性を備えたたくさんの方から薫陶を受けた、この出会いと切磋琢磨は、他校では経験のできない貴重な日々であったことと思います。

また、皆さんが関わってきた、一時間一時間の授業、一つ一つの学校行事は、全員で作り上げた貴重な教育実践であり、学校全体に豊かさと充足感を与えてくれました。

そしてそれは、本校の新しい伝統として、一つ一つが積み重ねられ、今まさに、後輩たちに受け継がれようとしています。

特に、コロナ禍にあった皆さんの最後の一年は、遠い将来、過去を振り返った時に、特筆に値すべき年だったと言えるでしょう。

年度当初の休校、会話や接触の制限、活動の自粛。

そうした中、徹底した感染症対策を講じ、県内でも先駆けて行った修学旅行。取りやめたり、県内の遠足に形を変えたりすることが取りざたされる中、皆さん一人一人が高い意識と強い責任感をもって行動し、見事に所期の目的を達成し、成功裏に戻ってきてくれました。本当にありがとうございます。立派でした。

また、本校史上、初の小中合同の体育大会。半日開催という窮屈な思いを強いましたが、新しい形の体育大会の可能性を感じさせてくれました。

そして何よりも、全校の児童生徒諸君があの時初めて一堂に会したのです。その圧倒的な光景を私は決して忘れることはありません。

皆さんのスピード感あふれる競技、力強い演武に驚嘆の声をあげた多くの下級生たちの姿。この学校の存在意義を強く、強く感じた一日でした。

この他にも、中体連や文化発表会など、皆さんの最上級学年としての活躍は、枚挙にいとまがありません。

これまでの皆さん一人一人の誠実でひたむきな姿に対し、心から感謝をします。ありがとう。感動しました。

そんなたくさんの感動をくれた皆さんが、新たな環境に向けてスタートを切るにあたって、そのはなむけに、次のことを伝えたいと思います。

これから皆さんは、それぞれが進学をして、新しい一步を踏み出すこととなります。ここで学んだこと以上に、いろいろなことを学び、新しいものや新しい考え方を作っていく場面にたくさん出会うだろうと思います。

そのようなときに、「ジグソーパズル」を作る時のような姿勢ではなく、「組み立てブロック」を作る時のような、創造する姿

勢をもって取り組んでほしいと思っています。

「ジクソーパズル」ではなく、「組み立てブロック」。

最近、私はこうしたイメージで、新しい時代が求めているものを考えています。

「ジクソーパズル」は、決まった枠の中に、自分の知識と判断力を駆使して、ピースをはめ込んで完成させます。

これまでの社会は、自分の持っている知識をいかに素早く、いかに適切に使って、定められたゴール、「正解」に到達するかが問題でした。

しかし、これからの時代は、そういう時代ではありません。

価値観の異なる他者と一緒に、まさに新型コロナウイルスに代表される、今までになかったような課題に対し、「正解」ではなく、「最適解」を協働して作り上げていく時代です。

それぞれが持っている力を合わせて、新しいもの、新しい考え方をどんどん創造していくことが求められているのです。

「組み立てブロック」は、自由な発想のもとでいろいろなものを作り上げることができます。

若い自由な発想を最大限に生かしながら、新しい時代に向かって創造的な活動に、どんどんチャレンジしてほしいと思います。

では、その時、助けとなることは、何でしょう。

それは「志」です。

江戸時代末期の儒学者である佐藤一斎は『言志録』げんしりくの中で次のように記しています。

「志を立て、これを求めれば、たとえ薪を運び、水を運んでも、そこに『道』はあって、真理を自得することはできるものだ。まして、書物を読み、物事の道理を窮めようと専心するからには、目的を達せないはずはない。しかし、志が立っていないければ、一日中本を読んでいても、それは無駄ごとにすぎない。学問をして聖者になろうとするには、志を立てるより大切なことはない」と。

皆さん一人一人には優れた才能があります。これまで九年間の学びを礎として、これから始まる学びの本番を大いに愉しんでください。その時には、志をしっかりと立て、もっと主体的に、もっと積極的に考えながら学び続け、自分のため、人のため、社会のため、自分の夢に向かって精一杯努力してください。私の言いたいことはそれだけです。

さて、もう、別れの時が近づいてきました。

「深山大沢龍蛇を生ず」しんざんだいたくりようだ。何度か皆さんに紹介してきました。少しは耳に馴染ませてくれたでしょうか。

これは、もともと、中国古代の史書、「春秋」の解説書である

「春秋左氏伝」に出てくる句とされていますが、「山深く、大きな池のある場所から龍は生まれ出る」という意味です。

それはとりもなおさず、「自然の懐ふところ深い場所にある、この庠舎、この学び舎で、才能、力量に優れ、志を高くもった「龍」のような人物が育つ」とうことです。

今、まさに、「龍」となって大空に舞い上がっていかうとする姿を今日の皆さんの姿に重ねるとき、私は胸が熱く高鳴ります。

四月からは、それぞれの場所で、それぞれの新しい挑戦が始まります。どうぞ、高い志、熱い思いをもって、自分の足で歩いて行ってください。

この先、うまくいくことも、いかないこともあるでしょう。しかし、「失敗」を「失敗」のままにしない、「経験」にする強さが、この庠舎で学んだ皆さんには脈々と受け継がれているはずです。

この九年間を誇りに、前に進んでください。

最後になりましたが、保護者の皆様には、今回の卒業式に当たっても、出席に制限をかけるなど、無理なお願いを申し上げませんでした。

特に、この一年間の教育活動においては、皆様方のご理解とご協力がなくては、一步も前に進みませんでした。

そうした中、あたたかくお力添えをいただき、誠にありがとうございます

ございました。この場を借りて、衷心から御礼申し上げます。

また、今後、お子様のますますのご活躍を職員一同、心から応援し、祈念しております。

では、卒業生の皆さん。お別れです。また会える日を楽しみにしています。それまでお互い元気でしっかり自分を鍛えましょう。

卒業おめでとう。

令和三年三月八日

多久市立東原庁舎中央校 校長 下村昌弘